

桜さく島

見知らぬ世界

竹久夢二

青空文庫

路みち

青あをい野原のはらのなかを、白しろい路みちがながくくつゞいた。

母はとも姉あねとも乳母うばとも、いまはおぼえもない。

おぶさつたその女をんなが泣なくので、私わたしもさそはれてわけはしらずに、

ほろく泣ないてゐた。

女をんなの肩かたに頬ほをよせると、キモノの花模はなも様が涙なみだのなかに咲さいたり
 蕾つぼんだりした、白しろい花片はなびらが芝居しばゐの雪ゆきのやうに青あほい空そらへちらく

と光ひかつては消きえしました。

黄楊つげのさし櫛ぐしがおちたのかと思おもつたら、それは三ヶ月みかげつきだった。

黒髪くろかみのかげの根付ねづけの珠たまは、空そらへとんでいつては青あをく光ひかつた。

また赤あかい簪かんざしのふさは、ゆらくとゆれるたんびに草くさはら原はらへおちて

は狐きつね扇あふぎの花はなに化ばけた。

少年せうねんの不可ふか思議しぎな夢ゆめは、白しろい路みちをはてしもなく辿たどつた。

死し

花道はなみちのうへにかざしたつくり桜ざくらあひだの間から、涙なみだぐむだカンテラが
 数かずしれずかゞやいてゐた。はやしがすむのをきつかげに、あの世よ
 からひゞいてくるかとおもはれるやうなわびしい釣鐘つりがねの音ねがき
 こえる。

金の小鳥のやうないたいけな姫君は、百日鬘の山賊が
 ふりかざした刃の下に手をあはせて、絶えいる声にこの世の暇
 乞ごひをするのであつた。

「南無阿弥陀仏」

きらりと光る金属のもとに、黒髪うつくしい襟足ががつく
 りとまへにうちのめつた。血汐のしたゝる生首をひっさげた山
 賊んぞくは、黒い口くろくちをゆがめてからくからと打笑つた。

あ、お姫様は斬られたのか。

それは少年のためには「死の最初の発見」であつた。

もう姫君は死んだのだ、死んでしまへば、もうこの世で花も、
 鳥も、歌も、再びきくこともみることできないのだ。

なみだ
涙は少年の胸をこみあげこみあげ頬をながれた。

「死顔」も「黒き笑も」涙にとけて、カンテラの光のなかへぎらぎらときえていつた、舞台も棧敷も金色の波のなかにたゞよふた。

その時、黒装束に覆面した怪物が澤村路之助丈えと染めぬいた幕の裏からあらはれいで、赤い毛布をたれて、姫君の死骸をば金泥の襖のうらへと掃いていつてしまった。

死んだのではない、死んだのではない、あれは芝居といふものだと母は涙をふいてくれた。

さうして少年のやぶれた心はつくのはれたけれど、舞台のうへで姫君のきられたといふことは忘れられない記憶であつた。ま

た^{あかけつと}赤毛布の裡をば、
死^しんだ姫君^{ひめぎみ}が歩^{ある}いたのも、
不^ふ可^か思^し儀^ぎな発^は
見^{けん}であつた。

傀儡師くわいらいし

………
 大阪おほさかをたちのいても、わたしが姿眼すがめに

たてば、借行輿かりかごに日ひをおくり………

口三味線くちさみせんの浄瑠璃じやうるりが庭にはの飛石とびいしづたひにちかづいてくるのを、

すぐ私わたしどもはきゝつけました。五十三次つぎの絵ゑ双六そうろくをなげだして、障しやうじ子を細目ほそめにあけた姉あねの袂たもとのしたからそつと外面とのもをみました。四十よばかりの漢をとこでした、頭あたまには浅黄あさぎのツキンをかぶり、身みには墨すみぞめ染ぞめのキモノをつけ、手ても足あしもカウカケにつゝんでみました、その眼めは、遠とほくくにの藍あをい海うみをおもはせるやうにかゞやいてみました。棒ぼうのさきには、鎧よろいをきたサムライや、赤あかい振ふり袖そでをきたオイランがだらりと首くびも手てをたれてみました。漢をとこは自分じぶんのかたる淨瑠璃じやうるりに、さも情じやうがうつつたやうな身振みぶりをして人にんぎやう形がたをつかつてみました。赤あかい襠しかけをきた人にんぎやう形がたは、白しろい手て拭ぬぐひひのしたに黒くろい眸ひとみをみひらいて、遠とほくききた旅たびをおもひやるやうに顔かほをふりあげました。

………奈良の旅籠や三輪の茶屋………

五日、三日夜をあかし………

と指おりかぞえ

………二十日あまりに四十両、つかひはたし

て二歩のこる、金ゆへ大事の忠兵衛さ

ん………

といつて、傍らに首をたれた忠兵衛をみやつたガラスの眼には
 涙があるのかとおもはれました。

………科人にしたもわたしから、さぞにくかろう

お腹もたとう………

思ひせまつて梅川は、袖をだいてよろしくよろ、私の方へよろ

めいて、はつと踏^ふみとまつて、手^てをあげた時^{とき}、白^{しろ}い指^{ゆび}がかちりと
鳴^なつたのです。
私^{わたし}は泣^なきながら奥^{おく}へはしりこみました。

あはのなるとじゆんれいうた
阿波鳴門順礼歌

ふる里さとをはる／＼

こゝに紀三井寺きみいでら

花はなの都みやこも近ちかくなるらん

「お鶴つるは死しなないんですねえ、
母かあさま様」

「さいなあ、阿波の鳴門をこえて 観音様のお膝許へいきやつたといのう」

「でも、お鶴はお祖母様の手紙を母様にみせたの」

「さいなあ、お鶴の母御は、その手紙をお鶴の懐からとりだして読みながらよみながらお泣やつたといのう」

「母様、お鶴は死んだの」

「なんの、死ぬものぞいの。お鶴は観音様のお膝許へいつたのやがな」

「母様、お鶴はなんて言つて歌つたの」

賽の河原で砂手本

一ツつんでは母のため

二ツつんでは父のため

三千さんぜんせかい世界の親おやと子こが

死出しでの旅路たびぢをふだらくや

あすの夜よたれか添乳そへちせん

「か……母様かあさま」

「なあに」

「お……お鶴つるは死しなないんですねえ」

母は、

ふたりふたりの少年せうねんが泊とまつた家は、隣りんそん村にも名なだたる豪家がうかであつた。
 門もんのわきには大きな柵おほひいらぎの木が、青あをい空そらにそゝりたつてゐた。
 私わたしどもは柱はしらや障子しやうじの骨ほねの黒くろずんだ隔座ざしき敷へとほされた。床とこには
 棕櫚しゆろをかいた軸ちくが掛かつてゐたのをおぼえてゐる。

「健作けんさくの母はでございます。学校がっこうではもう常住じやうぢゆう健作けんさくがお

世話せわさま様さまになりますとてね」

とお母様かあさまは言いはれて、私の顔わたくしかほをしみ／＼な情けぶかい眸ひとみでみられた。

わたしは眼めをふせて、まへにおかれた初霜はつしもの皿さらの模様もやうへ視線しせんをやつてゐました。

「まあ」

と、思おもひもかけぬ声こゑにおどろいて、私わたしははつと顔かほをあげたのです。お母様かあさまは、はしたない行おこなひをおしつ々むやうに

「草之助ささうのすけさんでござんしたか。ま、おほきくおなりやしたこと

わい、なんぼにおなりやんしたえ」

「十二です」

「まあそんなになりますかいなあ」と夢みる眸をあげて「ようま

あ、よつてくださした」

思ひいつてこういはれた言葉に、曾ておもひもしらぬ感激をお

ぼえて、私はしみ／＼とよそのおばさんを見ました。齒を黒く

そめて眉の青い人で、その眼には泪があつた。

縁側で南天の実をみてゐたら、おばさんはうしろから私の肩

を袖で抱いて

「おばあさんもおたつしやですかえ」

ときかれた。

千代紙や江戸絵をお土産にもらつて、明る日、村へかへつてきま

した。

まつりひひが暮れて友達のうちへ泊つた一分始終を祖母に話してきかせました。すると、祖母は眼をみはつて、そのかたは父の最初の「つれあひ」だつたと驚かれました。

この日から、少年のちいさい胸には大きな黒い塊がおおかれました。妬ましさににて嬉しく、悲しさににて懐しい物思をおぼえそめたのです。蔵のまへのサボテンのかけにかくれては私とおなしに眼のわきに黒子のある、なつかしいその人のことを、人しれず思ひやるならばせとなつたのです。ですが私は、その人が私の「生みの母」であるといふことをたしかめるのを恐れました。やつぱりよそのおばさんです。私は、さう思つてゐねばなりませんでし

た。

まど
窓のムスメ

ちうまどちうまどの欄干てすりにもたれて雨あまだれをみてゐるムスメがあつた。

肩かた揚あげのある羽織はおりには、椿つばきの模様もやうがついてゐた。髪かみはおたばこぼ
んにゆつてゐたやうに思おもはれる。

俯うつむ向むいてゐたゆえ、顔かほはどんなであつたかそれはわからない。

けれど、五月雨の頃とて、淡青い空気にへだてられたその横

顔はほのかに思ひうかぶ。

戸外にはカリンの木がうはつて、淡紅の花の香が暗い雨の庭

にたちまよふてゐた。

それが何時であつたとも、そのムスメが誰であつたとも今は知る

よしもない。

母にきけど、そんな窓は見たことがないといふ。

姉にきけど、そのやうなムスメは知らぬといふ。

その頃よんだリイダアなどの絵の女かとおもふけれど、それもた

しかでない。

ムスメはつひに俯いたまゝ、いつまでも私の記憶に青白い

影^{かげ}をなげ、
灰^{はい}色^{いろ}の忘^{ぼう}却^{きやく}
のうへを銀^{ぎん}の雨^{あめ}が降^ふりしきる。

炬燵こたつのなか

………
お庭にはのまえの亀岡かめをかに
君きみをはじめてみるときは
千代ちよもへぬべき心地こころちして………

美^み迦^か野^のさん^は、炬^{こたつぶとん}燧^{たい}布^ふ団^{だん}の綴^{とぢい}糸^{いと}をまるい白^{しろ}い指^{ゆび}ではじきながら、
離^{はな}室^{なれ}の琴^{こと}歌^{うた}に声^{こえ}をあはせた。

「あたしね、「黒^{くろ}髪^{かみ}」をあげたらこんどは「春^{はる}雨^{さめ}」だわ。い
ゝわね。はるさめ……………」

「……………」

私^{わたし}はだまつて美^み迦^か野^のさん^の鬘^{えくぼ}にうつとりとみとれてゐた。

「草^{さう}之^の助^{すけ}さん^てば返^{へん}事^じがない、いゝ嫁^{よめ}さん^{でも}とつたのかい」

「……………」私^{わたし}は笑^{わら}つてゐた。

「なぜだまつてるのさ。なにかおこつたの」

「うゝん」

「さ、一^いがさした」

「二がさした」

「三がさした」

「四がさした」

「五がさした」

「六がさした」

「七がさした」

「蜂^{はち}がさした、ぶんくぶん………」

「いや、美迦^{みか}さんはあんまりひどくつねるんだものな」

「いたかつて、ごめんなさい」

「そう言^いつて美迦^{みか}野^のさんは、あまへたやうにしんなりとしなだれか
ゝつて

「まあおかあいそうに」

と言いつて、赤あかくなつた私わたしの手てを熱あつくい唇ちびるでひつたりと吸すひました。

布団ふとんを眼深まぶかかにかぶつた小鳩こばとのやうに臆をくび病やうな少年せうねんはおど／

しながらも、女おんなのするがまゝにまかせてゐた。

少年せうねんは女おんなの顔かほをみあげるのさえはづかしかった。

青空文庫情報

底本：「桜さく島 見知らぬ世界」洛陽堂

1912（明治45）年4月24日発行

※近代デジタルライブラリー (<http://kindai.ndl.go.jp/>) で公開されている当該書籍画像に基づいて、作業しました。

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記を新字にあらためました。

※文中の「∴」は底本では1文字あたり4点ないしは5点の点線ですが、文字の幅に合わせた「∴」で代用しました。

※歴史的仮名遣いから外れたものも、底本通り入力しました。

※促音「っ」の小書きの混在は底本のままとしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：土屋隆

校正：田中敬三

2005年8月22日作成

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

桜さく島

見知らぬ世界

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 竹久夢二
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>